

# 筑後川昇開橋

福岡県大川市～佐賀県佐賀市

有明海に注ぐ筑後川を跨いで福岡県大川市と佐賀県佐賀市を結ぶかつての国鉄佐賀線の鉄道橋。供用開始は1935年5月。筑後川を往来する船を通すために全長約507mのうち、桁の一部約24mが垂直方向に約23m昇降する可動橋だ。干満の差が大きい有明海。軟弱な地盤の掘削は困難を極め、施工は自ずと難工事となり竣工まで3年を要した。昇開部の製作には横川橋梁製作所、八幡製鐵所、日本鋼管、浅野造船所をはじめとする名門企業が名を連ねる。開業当時は東洋一の可動式鉄橋と謳われたこの橋は1987年、佐賀線の廃線に伴い閉鎖、国から撤去勧告がなされる憂き目にあうが、地元の強い要望により1996年に遊歩道として復活した。今や地域のシンボル、観光資源として欠かせない存在となっている。

特筆すべきはそのロケーションの美しさだ。ほぼ毎日のようにこの地を散策し写真を撮り続けている男性と出会った。「夕暮れ時の光から夜の陰影、潮の満ち引き、太陽や月の位置によってこの橋は全く別の風情を見せてくれる。一度として同じ風景を見たことはありませんよ」。

その笑顔が自慢げだ。この地を訪れる人はコロナ禍で激減したとはいえ年間5万人を優に超える。係員も気軽に要望に応じて桁が昇降する様を間近に見せてくれる。夜はライトアップされ川面にその姿を映し出す。国の重要文化財、日本機械学会の機械遺産に認定されただけでなく、その華麗さが人の心を引き留めて止まないのだろう。刻一刻と表情を変える昭和初期の鉄橋。こうした土木構造物との向き合い方があるのかと改めて思い知らされながら、時を忘れて昭和初期に生まれた鉄橋の存在感に浸った。



建設計画は鉄道省の技師釘宮馨が統率、可動部の設計は石川島造船所（現IHI）で腕を磨き、鉄道省工作局技師として駅、港湾などの機械設計で数々の功績を残した坂本種芳が担った。マジシャンとしても名をはせた坂本は後に「新たなトリックで人を驚かすことが好きでその心理がこの可動橋にも作用した」と振り返っている。

